

情報のトリアージ

吉井 博明

消防審議会会長

(東京経済大学)
コミュニケーション学部教授



豪華客船タイタニック号が氷山に衝突し、1,500人もの犠牲者を出したのは、今から100年近く前のことである。タイタニック号が氷山に衝突する直前に近くを航行している船舶から7件の警告電信が発信されたが、そのうち船長に伝わったのは2件だけで、最も重要な警告電信は伝達されなかった。また、受信そのものを拒否した警告もあったという。その原因は、ジェームス・キャメロン監督の映画「タイタニック」をご覧になった方はおわかりのように、警告電信が発信された、ちょうどそのころ、通信室には多くの乗客が押しかけ大混雑しており、その対応に追われた通信士が警告電信を無視したり、船長に報告しなかったことにある。タイタニック号は翌日にニューヨーク港に着くことになっており、多くの乗客が出迎えの家族や親戚・友人に電信を打とうとしていたからである。緊急性が高く、乗客の命にかかわる重要な警告電信の受信や伝達が、緊急性の低い情報伝達（出迎えの連絡等）のために妨げられたのである。緊急性が高い重要な情報と、そうでない情報との仕分けと優先順位付けがなされなかったことによる失敗とみなすことができよう。このような現象は、「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則の情報版とでもいうべきものである。

災害時の情報伝達過程をつぶさに観察すると、この「情報のグレシャムの法則」で説明できる失敗例が多くみられる。1983年の日本海中部地震の際、大津波の警報伝達が秋田県庁で途切れたが、その理由も雑多な情報の中に重要な情報（大津波の警報）が紛れ込んだためであった。1991年の雲仙普賢岳で発生した大火砕流の直前に測候所から出された「山の様子がおかしいので避難させた方がよい」という貴重な情報は、島原市役所の中で消えてしまった。また、2000年の東海豪雨で大きな被害を出した西枇杷島町には多くの情報がファクシミリで入ってきたが、そのほとんどはすぐには役に立たない情報ばかりであった。そのため、町の防災担当者はファクシミリを見ることを途中で止めてしまった。ファクシミリの中には非常に重要な情報が含まれていたが、それらも見られることはなかった。このように、「情報のグレシャムの法則」にあてはまる対応の失敗は、大災害時には必ずといってよいほど起きている。

このような失敗を繰り返さないためには、重要度の高い情報を仕分けし優先的に伝達する仕組みをつくり、図上演習でその実効性を確認することが望ましい。昨年、ある市で行った地震を想定した図上演習では、市民などからの情報を受け付ける担当部門が殺到する情報の処理に手間取り、重要な情報が入ってきているにもかかわらず、トップにあげるのが遅れ、初動期の適切な本部対応ができなかった。情報のトリアージは簡単には身に付かないのである。災害時に具体的にどのように情報のトリアージを行うのか、その仕組みと具体的手法を図上演習の繰り返しによって身に付ける必要があると思われる。

消防の動き



平成19年
11月号

No. 440

- 危険物の規制に関する規則等の一部改正について
- 「現場急行支援システムに関する検討会」の発足
- 「危険物施設に係る津波・浸水対策検討会」の発足